

新年のご挨拶

— 私たちが目指すべき「坂の上の雲」とは —

院長 沼尾 利郎



あけましておめでとうございます。皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて、昨年は当院にとって大きな変化の年でした。7月から2次救急輪番病院となり一部の救急患者さんを受け入れるようになりました。その結果、輪番日における救急患者総数と入院患者総数は7月と11月で比べると各々3654名、1930名と大幅に増加しました。また、整形外科や外科の手術件数も前年より大幅に増加しており、平均在院日数も短縮しましたが（11月の一般病棟では18.4日）、看護師数の点で残念ながら看護基準の上位取得はまだ実現できていません。しかし、単に経営的な面だけでなく「転倒予防のためのメディカル・フットケア」など医療の質の向上にも取り組んできました。さらに10月からは、医療連携の推進を目的として「医療連携学術講演会」がスタートしています。医科大学の教授から最新の医学を講演していただきながら当院の診療内容や臨床研究なども紹介し、近隣の医療機関の皆さんと「顔の見える連携」を構築したいと考えています。

一方、私たち国立病院機構は昨年4月から第2期目に入っており、その目標の1つとして「良質な人材育成」があります。当院はこれまで医学生や看護学生など多くの実習生を受け入れてきましたが、卒前教育だけでなく資格を取った後の卒後教育にも力を入れています。「教育のあるところに人は集まる」という言葉のように、21世紀の医療を担う若い人々には私たちと共に更なるレベルアップやキャリアアップを目指して欲しいと思います。

昨年度単年の黒字化とこれまでの経営努力や医療の向上が機構本部に評価された結果、11月には本部のヒアリングを受けました。病棟建て替え等について詳細な意見を求められ現場の視察があったわけですが、NHU宇都宮病院が今後目指すべき『坂の上の雲』とは何でしょうか？それは病院や機構の理念にもあるように、「安全で質の高い医療を患者さんの目線に立って提供すること」であり、「患者さんや地域から信頼され、職員にとっても働きがいのある病院」の実現です。病院における様々な改革は今後も継続する必要があり、そのためには職員1人ひとりが職場での自分の役割と地域における病院の役割を自覚して行動することが大切です。近隣の医療機関や介護・福祉施設との連携をより一層進めながら、政策医療（重症心身障害者医療や結核など）と地域医療に貢献すべく努力いたしますので、皆様のご支援とご協力を心からお願い申し上げます。